

朝鮮平安北道南市地方の部落名

向山武男

朝鮮でも平安北道は昔から人間のワイルドなところで其の地名にも單純素朴の趣が現はれて居て、南鮮のものど大分に異ふ。私は中村教授の朝鮮地名の考説で大いに啓發された一人であるが茲に或る一面(村)を取出し、其中にある部落の地名を紹介してみる。

一體、朝鮮の面なるものは内地の村と比べると大概の場合面積がズツと廣く、従て一面内に山谷もあれば海岸もあると云ふわけで、地形上の區分と一致しないことが多く、折角の地名も山のものだか海のものだか一向纏まりがつかぬのである。それ故こゝでは行政上の區劃から離れて「隆起海岸及び之に接する丘陵地のローカルカラーを示す一地域」を取り其中の小地名を考察して見度い。場所は平北龍川郡の東南部、南

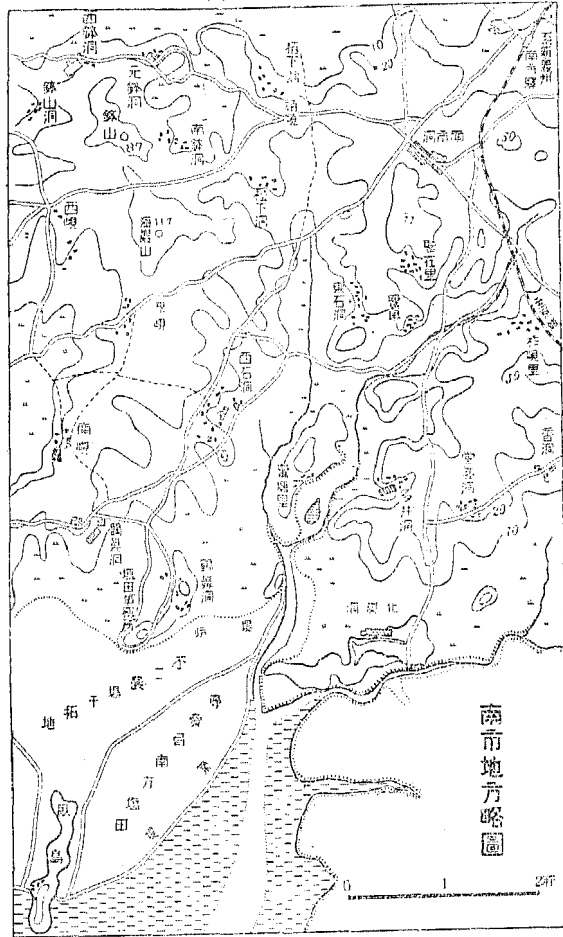
市驛を其の北端として以南、海岸に達する東西約五軒、南北約八軒の矩形の地域である。研究の都合上此地域を南市地方と呼ぶ。

北方、蓋馬高台に連れる平北の高原は南するに従ひ、漸次高度を減じ來りて此地方に於ては平均三四十米の丘陵に移り、其縁邊が海岸低地に没するところに幾つかの淺き谷が切れ込んで居る。舊汀線は谷々の可成り奥まで入り込み、或谷は其のヘッドに海成段丘を殘して居る。又直接丘陵の末端を削つて斷崖をなすものも少くない。此等丘陵の運續物たる幾多の小地塊が海中に沈降して其頭部を水面に現はして居るものが所謂龍川諸島で有名な漁業區域をなして居る。現汀線は遙か前方に進出し、一帶の干潟は從來空しく雁鳴の群集場となつて居たが近年に至り

鹽田が起り干拓事業が始まった。しかし未だ大部分は全くの泥海である。南市地方の聚落は殆ど皆、丘陵上か或は丘陵の海岸低地に接する裾

くなるを以て道路は丘陵のリッチや麓を通じて居る。丘陵の一斜面へから他斜面へ越す鞍部を峴コノエと云ふ。此邊に何々峴なる名の多い理由は之である。

第一圖



に散在して居る。大正十二年八月の大津波の際に田畑は大概やられたが人畜の損傷の頗る輕微であつたのも首肯される。聚落の位置斯くの如

の祀つてある所から海の方を眺めると眼前三秆位の點に臥島スルツメマキム、蟬島の二島が約二秆の間隔を以て相並び、兩方共完全にランドタイドされ、臥

さて、新義州から京義線を南へ六驛目、南市と云ふ停車場で降りる。之が南市地方の北端にあたる。此處より眞直ぐ南に六秆程行くと路は、北方からの丘陵の末端の一塊鶴峯ツルノミネと云ふのが舊海岸線に臨んで横はつて居る頂上に出る。專賣局鹽田事務所の裏、太神宮

島には十數戸の部落が見ゆる。新汀線は島の前方に出て居る。此の一帶の新陸地の舊汀線に近い部分は西方五軒なる不二農場の干拓地に接続して其一部を形成し新汀線に近い方面即ち沖の方は專賣局の鹽田となつて面積二一七町歩、立派な天日鹽を産して居る。

此邊は陸地の隆起が迅速著大で、遠くに見ゆるあの幾つかの島々が陸繋されて、平沙に横はる大龜の如き地形を呈するのも間もないことであらう。

龍川郡の沿岸一帶の地形は實に斯くして發達したもので、不二農場の所在地なる府羅面附近の如きは坦々たる水田地の中に堅い結晶片岩類より成る小地塊が各所に突起し、挿島、細島、獅子島、さては運飼浦、耳島浦と、何れも生々しき海中島嶼の陸化を物語つて居る。

世上に名高い彼の多獅島築港なるものは府羅面の沖に一系列に横はる大多獅島、小多獅島を千三百間の大築堤によつて府羅面南端の陸化島たる獅子島の郭串嘴に連接して築堤の兩側に不凍港

を作るにある。新義州への距離二十六哩、一のトンネル無く鐵道を敷くことが出来る。冬期四ヶ月間結氷に苦しめらるゝ新義州、安東縣に與

第二圖



多井洞

一婦人が釣瓶をもつて水を汲まうとして居る、二三の女兒は野草の獲物の整理に餘念のない有様。

へる經濟上の利益は莫大なものだらうが、地的に、海岸の迅速なる隆起と鴨綠江の多量なる流出土砂とを考へる時、其將來は悲觀せざるを

得ない。

さてこれから南市地方の小部落名を調べて見度
い。

○堤防を築いた鹽田や干拓地以外は大部分沮洳
地で、干潮時には沼澤の泥は鹽で白くなつて居
る。部落が舊汀線附近に位置する時には殆ど何
處からも泥炭を産出する。其質極めて劣悪で、
土民は大抵温突の燃料にして居る。一立方尺位
の塊にして賣買して居る。石炭洞(化石洞)なる
名は斯くして起つた。併し現在では龍川郡の西
部、楊市附近に多く出る。

○又丘陵の一端が海岸低地に接する裾に地下水
の湧出口が並んで現れた、めに豊富な水量をも
つた井戸が多いから此處に部落が起つた。飲料
水を重視する鮮人等は之に多井洞の名をつけて
居る。(井戸の多い部落の意)

○鷺漚里と云ふ部落附近には海岸段丘の立派な
ものがあり、其下には浅い沼が長く連なり、私
の行つた際には數千の雁鴨が群集して居たが、
鷺も多く來るものと見ゆる。鷺漚の名は之から

出たのである。(鷺の來る池のある部落の意)
○丘陵が靜に南に低まつていはゆる障風向陽の
地相をなした處にこんもりと老松の茂つた饅頭

圖 三 第

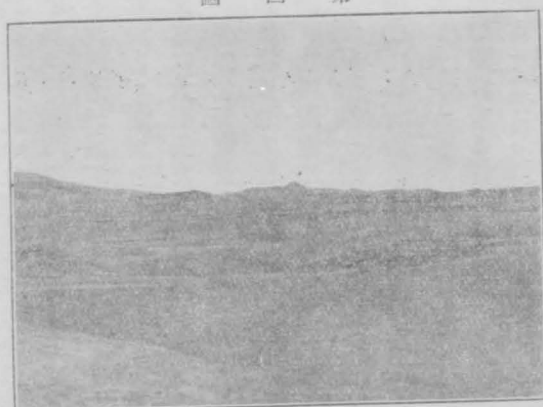


鷺 場

形の 小丘
があり、
左右及び
前方に部
落を控へ
た如何に
も聖人の
墓でもあ
りさうに
見ゆる所
がある。
之に聖在
里の名の
あるも面

白い。(孔子廟のある部落の意)
○聖在里から一軒程西によつて又一つの青松に
圍まれた小丘が見つかる。これも麓に僅かな人

家を散在させて居て、折柄の夕陽をかざして眺めると何か大きな鳥が其上を數十羽入亂れて飛んで居る。更によく見ると、満山ごの松の樹の



望遠山鉢

のものと同じく小枝で造つてある。抑々此處は鷺塙と呼んで、いつの頃よりか鷺がこれを安住地として集り繁殖し、年中立去らぬのである。

頂上にも
白い大きな長い頸の鳥が立
て居る。
近寄つて
みると松
の頂は皆
枯れて、
ごの樹に
も一、二
箇の巢が
ある。カ
チ鳥(鶇)

彼等が年二回の換毛期に樹上より落す美しき羽毛は、之を採集して支那人に賣ることに依り、少からぬ利得を部落民に與へる。鷺は殆ど大部分蒼鷺で白鷺も少しは居ることである。鷺塙の部落民は言ふ「白鷺毛の一寸は黄金一寸の價の十倍する」と。鷺塙は平北だけでも數箇處あるさうだ。(鷺塙は鷺の集まる部落の意)。

○南市の驛から四料半程西に當つて、低く起伏する丘陵の中にボックリと恰も椀を伏せた様な小突起を見る。海拔僅か八七米に過ぎないが海近き此邊では唯一のモナドノックとして威風堂々四方を瞰下して居る。従て質朴な土民の眼を惹くことが多く其形状よりして鉢山(鉢は鮮人の食器)と呼んで居る。其周圍の部落名、東鉢洞、西鉢洞、南鉢洞は皆此山に對する位置からして起て居るのである。

○多井洞の東に堂峰洞と云ふのがある。堂峰は少し大袈裟だが兎に角、部落背後の丘陵上に例の朝鮮式の祠堂がある。今はみすばらしいものだが或時代には相當繁昌したものらしい。

○更に其東隣に香洞キョウドウと云ふのがある。香洞なる名稱に就ては今の所一向捉へ所がないが、或る鮮人の物識りは云ふ「此附近は昔香キョウを多く産し其結果此名が出たものだらう」と香と云ふのは鮮語で一名香木キョウキとも云ひ、國語ではイブキ或はビヤクシンと呼ぶ。朝鮮獨特の樹で香氣を放ち鮮人は祭祀には欠くべからざるものとして之を焚く。市日イチヒには小さい木片コツバにした此の木を賣つて居る。内地で白樺の皮を買つて焚くのとよく似て居る。

○香洞の北、丘陵の上に鐵道線路を挟んで散在した一部落がある。即ち柞クヌギ峴里クヌギノコである。此邊は之より東方車塋館方面へかけ平北でも有數な柞蠶飼育地で到る處に柞(クヌギ)の林を見る。柞蠶繭は從來は殆ど皆芝罘地方から來る支那人に買取られたのであるが近年は多く新義州に集り繭紬類、靴下類に造られて各地に送り出される

○南市洞は龍川郡の關門で殊に冬期には龍岩浦方面から新義州安東又は京城へ行くには是非通らねばならぬ處故甚だ活氣がある。南市は龍川

郡邑(舊邑)から南にある市場の意である。京義線開通と共に停車場が在來の南市洞から二軒程北に位置したがため、こゝに新しく停車場チヨウシャドウと云ふ一部落を出現し、漸次中心が之に移りつゝある。

○南市洞の西方に栢峴バクヒョムがある。地形上立派な峴であつてそこには老松がこんもりと密生して居る。そして峴の北側の部落は栢下洞バクハト、南側のは松下洞である。恐らく昔は松よりも栢(朝鮮松)の方が多かつたものだらう。

○松下洞から南に下ると谷を隔て、東石洞トシツクトンと西石洞セシツクトンとが相對して居る。東側洞西側洞なら意味は明瞭だが石を用ひた理由がわからぬと土地の古老に聞いて見た。「昔は東石洞は無くて西石洞のみであり、單に石洞と呼んで居た」とのことだつた。そこで氣がついた。一體此邊は丘陵漸次陵夷して海岸低地に沒せんとするところで風化の進んで居るために岩石と云ふものが珍しいのである。然るに此の石洞の直ぐ北に、此地方での最高點海拔一一七米の海巖山ヘイアムサンが突兀とし

て聳わて居る。此部落の住民にオンドル石を供給するものも漬物の壓し石を與へるのも此山である。石に對する感謝の念はいつとなく部落の名稱に具象されたものではなからうか。

○南市地方の舊海岸に接して鶴巢洞、鶴舞洞の二部落が並んで居る。鶴舞洞の一小丘には鶴峯の名さへついで居る。地形上、鶴巢洞は西に丘陵を負ひ、鶴舞洞は一帯の廣場である。昔海がもつと近かつた頃、此邊で鶴が巢を營んだり舞遊んだりしたことがあつたかも知れぬが、それは想像であつて地名の起原をそれと斷定する程大膽にはなれぬ。唯々斯んな名稱のあることを丈けを記しておく。

以上南市地方の部落名を一通り拾つてみたが大體に於て丘陵又は海岸低地の色彩を表はして居るものと思はれる。

勿論私共が貧弱な材料を提げて考へるのであるから見當外れのこと多からうと信するが、斯んな風に頭を働かせて各地の風物を眺めるる地學の限りなき興味は物寂びしい朝鮮の生活をし

ていと愉快なものたらしめる事は確かである。

南紀湯崎温泉 (石川成章) 本誌第五卷第五號

四四〇頁地圖の地名

前號第三四頁地圖の註記左の如し

I	田中井	XVI	無名
II	海井	XVII	鑽油
III	瑞穂湯	XVIII	伊藤試錐井
IV	瑞玉湯	XIX	有田試錐井 (不認溫泉)
V	生糸湯	XX	萬屋湯
VI	三院湯	XXI	仙氣湯
VII	常喜院新湯	XXII	屋形湯
VIII	同舊湯	XXIII	瓦斯噴虫所
IX	試錐院定地	XXIV	試錐井
X	置屋井	XXV	湯崎間試錐井
XI	銀砂湯	XXVI	淡路湯
XII	不老湯	XXVII	濱の湯
XIII	岩間湯	XXVIII	新湯
XIV	黃金湯	XXIX	崎の湯
XV	黃金湯	XXX	不知井